新 歴史の見える風景

国吉城

美浜町佐柿

越前と若狭の国境に築かれた「境目の城」

▲続日本100名城に選定されている美浜町指定史跡国吉城趾、弘治２年に若狭国守護武田氏の重臣粟屋越中守勝久が築いたとされる。織田信長も宿営し、本丸から若狭の海を眺めたとの伝承もある。

本丸跡の北西虎口付近▶

国吉城は、越前国との国境に接する若狭国三方郡佐柿の城山（標高１９７ｍ）に築かれた城である。弘治２（１５５６）年、若狭守護武田氏重臣の粟屋勝久が古城跡を利用して築城したとされる。

戦国期、武田氏の若狭支配は、重臣の反乱や一族の内訌に次第に弱体化した。越前の朝倉義景は、母が武田氏出身でもあり、若狭の安定化のため武田氏を支援し、ついには兵を小浜に入れ、当主の武田元明を保護し、一乗谷へ連れ帰り居住させた。しかし、この措置は武田氏家臣団の一部から強い反発を招き、粟屋勝久もその一人であった。

永禄13（１５７０）年４月、織田信長は越前朝倉氏を討つため、三万の軍勢を率いて京を出陣し、若狭の熊川に入った。この時、朝倉氏に反感を抱く武田氏家臣が熊川で信長を迎え入れている。信長はその後、粟屋勝久の居城国吉城に入り、越前攻めの軍議を開いたと伝わる。

同月25日、織田軍は敦賀へ進撃して天筒山城を攻め落とし、さらに金ケ崎城を降伏・開城させたが、妹婿の小谷城主浅井長政が離反して背後から迫ったため、信長は撤退を決断し、若狭を経て京へ退いた。信長の生涯において屈指の危機「金ケ崎の退き口」である。信長撤退後も粟屋勝久は反朝倉の姿勢を貫き、国吉城は織田方の最前線として朝倉氏と対峙することになった。

元亀４（１５７３）年、信長は浅井氏の小谷城攻撃を強化、朝倉義景は浅井氏を救援するため出陣するが、情勢が悪化し敦賀方面へ退却した。しかし、織田軍の追撃を受け、近江との国境刀根坂で大敗を喫し、兵の大半を失った。義景は一乗谷へ帰陣した後、大野へ逃れるも、ついに自害に追い込まれた。

この間の朝倉氏と粟屋勝久の国吉城をめぐる抗争は『国吉籠城記』に記されており、城は朝倉軍の度重なる攻撃にも落城せず、「難攻不落の城」として知られるようになった。ただこれを裏づける同時代の資料は他になく、攻防戦が史実であるか物語であるかは定かではない。それでも、国吉城が対朝倉軍の最前線に位置していたことは確かである。

現在、城跡の山麓には「若狭国吉城歴史資料館」が建てられ、城の歴史や発掘調査の成果が展示されている。遺構は資料館横の城主居館跡と山城部分に大別され、資料館横の遊歩道から登ると、約20分～30分で本丸跡に到達する。途中に二の丸跡や石垣の遺構が見られ、尾根沿いには見事な連郭曲輪群が広がるなど、見どころが多い。山頂の本丸跡には虎口跡が残り、城址碑が建っている。ここからは、若狭湾や丹後街道沿いの街並みを一望できる。

なお、遺構の一部は豊臣期から江戸初期に改修されており、この点に留意が必要である。

（文　奥山秀範）

▲山麓の城主居館跡や家臣の屋敷地

▲平成21年開館の若狭国吉城歴史資料館